

調査で実感! 花の軍馬山2010



軍馬山では、本町で確認されている植物のうち4分の1以上である223種を見ることができます。

郷土館では、毎年軍馬山を散策しながら花の開花調査をしています。

毎年違うルートを歩きますので、新しい発見があるかもしれません。

- 日 時／6月20日(日)、午前9時30分～正午
- 集 合／軍馬山スキー場下の駐車場 (小雨決行)
- 定 員／10名

(小学生以下は父兄同伴)

- 参加料／無料
- 申込期限／

6月18日(金)の正午

- 申し込み／郷土館

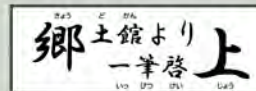
※定員になり次第締め切りますので、ご了承ください。



大川のほとり

郷土館だより (第46号) 一
☎487-2332

開館時間
午前9時30分～午後4時30分



今年は、釧路集治監開庁から125周年を迎えます。原胤昭も郷土館となったこの建物の中を、かつて歩いたのでしょ。 (坪)

の硫黄採掘に従事しており、胤昭はこの硫黄採掘を視察しました。採掘は安田善次郎の経営で進められ、山のおもとに外役所を設置し500人の囚人を雇用して大規模に行われていたのです。そこでは硫黄山から吹きたす亜硫酸ガスと硫黄粉塵の中、囚人たちはクワとツルハシのみで硫黄塊を採掘していました。過酷な環境のため亜硫酸ガスにより失明者が相次いだほか、食事が粗末(※1)であったため、水腫病が囚人たちの中で蔓延していました。取り締まる看守らも、有毒ガスにより意識が朦朧とした状態で戒護していたため、鎖に繋がれた囚人に少しでも反抗の気配があると判断したときにはサーベルで脅したり、切り捨てるといった非情な手段が取られました。看守もまた正常な判断力を失っていたのです。後にこのような異常な状況を指し「緩慢なる死刑」であった(※2)と標茶町史で評されました。この惨状を目撃した胤昭は仰天し、直ちに典獄大井上輝前に就業の中止を進言しました。大井上もこの報告に驚き、胤昭と共に硫黄山へ行き状況を確認しました。釧路集治監では川湯硫黄山の採掘を囚人労働により進めることが当初の設置目的の一つでもあったため、重要な外役作業でしたが、胤昭の進言と大井上の英断により、1年余りで撤退しました。

胤昭と接触し大いに感銘を受けた大井上の懇願により明治21年、胤昭36歳のときに、釧路集治監の初代教誨師として赴任しました。なお、道内の集治監では胤昭が最初の専任教誨師であり、キリスト教教誨師の草分けでした。年棒も以後の教誨師と比べてかなり高額でしたので、その期待の大きさが伺えます。また、標茶へ来る際のエピソードが残されて



釧路集治監赴任時の原胤昭

自らも監獄に収監され、監獄のあり方について身をもって知ることとなった胤昭は、明治20年8月に無期徒刑囚の護送を兼ねて、収監されている囚人の実態を知る目的で釧路集治監へ向かいました。当時釧路集治監では、囚人たちが弟子屈町川湯の跡佐登硫黄山

くろしゅうちゅうかんしゅうかいし 釧路集治監教誨師

釧路集治監人物伝

12

免囚保護の父 原胤昭(中編)

展示編 (歴史の展示)

郷土館では先史時代から開拓期まで、5つの歴史展示室があります。大きな博物館では展示専門の業者がきれいで見やすい展示を作る場合が多いですが、当館では学芸員が手作りした展示がほとんどです。手作りの場合は新しい情報や発見を、すぐ展示できます。一昨年発掘した土器や3年前に頂いた標茶の古写真をすぐに展示できるのは、手作りならではの良さです。



昨年整備した先史時代の展示

標茶で見られる、
四季折々の旬な
生き物を紹介します。



- 名前 / ルイヨウボタン
Caulophyllum robustum (メギ科)
- 見られる時期 / 5～6月
- よく見つかる場所 / 低地～山地の林の中
- 撮影地 / 軍馬山
- 特徴 / ボタンの仲間ではないのですが、葉がボタンに似ている(類葉牡丹)ため、この名前があります。山でウドを採っていると、近くに咲いていたりします。6枚の花びらのようにみえる部分は「がく」で本当の花はその中央にあります。

います。胤昭は本州から家族と船に乗って釧路港へ着きましたが、当時港には防波堤がありませんでした。はしけ(※3)が迎えに来ましたが、うまく本船に近付けず、上陸には何時間もかかり苦労したと、胤昭の息子泰一によって記録されています。原胤昭一家は船酔いもあり釧路標茶間は川舟(※4)を使わず、釧路川沿いに馬を使って標茶へ行きました。胤昭の日記には、明治21年3月末に標茶へ到着したことが記されています。

標茶に着いた胤昭は、明治21年4月2日に大井上より教誨師の辞令を受け、翌日から教誨活動を実施しました。胤昭は教誨師としての活動を、それまで一般的に行われていた大勢の囚人に対し説法を聞かせるやり方ではなく、囚人一人ひとりに対し閉め切った個室で時間をかけて面接し、対談を深めることにより教化を図る方法を取りました。集治監に収監された囚人は無期懲役の受刑者が多く、個室面談は危険が伴いましたが、胤昭は気にすることなく囚人の話を聞きました。こうした教誨のあり方は、これまで行われてきた悪事に対し罰を与えるとは異なる考え方であり、今日の行刑へと繋がる教化善導(きょうかぜんどう)に基づく考え方です。胤昭がこうした教誨活動を実践できたのは、胤昭自身の学習と経験、そして実行力によるものですが、当時としては革新的なこの方法を認め、胤昭に一任した大井上の判断もまた評価することができます。

胤昭は教誨師としての活動以外にも、多くの足跡を標茶に残しています。赴任した明治21年4月7日より標茶小学校の授業生となり、看守の息子や標茶市街に住む人々の子どもの教育も行いました。そのほか胤昭は、現在の図書館前付近に自宅を構えていましたが、その自宅を標茶の人々のため、日曜学校や礼拝説教を行う場として開放していました。胤昭の妻も付近の母親たちに、読み書き、裁縫、編み物を教えるなど、新興の町標茶にて、文化的な活動も広めたのです。しかし、この後胤昭と大井上典獄に、その後の人生を左右する大きな事件が待ち構えていたのです。(後編へ続く)

※1 外役所での囚人の食事は、白米4合、たくあん3切れ、具のない味噌汁が普通であったといえます。また硫黄山付近は、飲料水の水質も悪かったそうです。

※2 硫黄採掘6カ月間の作業中にて従事した3000余人のうち145名が病にかかり、その内42名が死亡しました。従事人数を仮に3000人とすると罹患率は48%、死亡率は14%にも上るそうです。

※3 船着場のない場所では、乗員と荷物を陸に上げる際に使われる平底の船。

※4 当時の囚人護送では、標茶釧路間は川舟を利用しました。標茶釧路間の道路開削は、明治になってから開通しました。ただし、通年使えるような道路ではなく、春先や大雨の後にはぬかるんでひどい道になったといえます。